

# 社会的養護における里親の可能性

— 血のつながりを超えて —

学校教育専攻

幼年発達支援コース

松本 なるみ

指導教員 岩崎 美智子

## 1. 研究の目的と背景

親の行方不明、家庭崩壊、養育放棄、虐待、精神疾患を含む疾病、失業等々の諸要因から、生まれた家庭で継続的な養育をうけられない子どもたちの数は、2003年2月現在、日本全国で約3万人と報告されている。そのような子どもたちの養育の確保と権利の保障をする為に社会的養護と呼ばれる制度がある。

2004年度の報告によれば、日本に暮らす養護児童のうち「家庭的養護」と呼ばれる里親や里親型グループホームに委託されている子どもは、約2,454人、乳児院や児童養護施設へ入所している子どもは、約33,439人となっている。この数字は、家庭的養護より施設養護が圧倒的に多いという日本の現状を示している。これは、家庭的養護が主流の欧米諸国とは反対の傾向を示している。欧米においては、社会的養護というと里親による養育や養子縁組の事を指し、施設養護は割合として低いものになっている。それは、保護を必要とする子どもに対する処遇を決定する際に、一定の養育者との一貫した心理的つながりをもち、子どもたちが家族の中で生活することを保障する「パーマネンシープランニング」という理念が確立されているからである。

このように、日本においては積極的に取り組まれているとはいえない里親制度であるが、本研究では、里親と里子が共に暮らすという日常

や体験を描きだし、当事者の視点から子どもの養育に必要な要因を検討することによって里親養育の可能性を探ることを目的とする。

## 2. 研究方法

①先行研究より社会的養護について整理する

②面接調査

<調査1>里子へのインタビュー

被験者 成人した里子3名

<調査2>里親へのインタビュー

被験者 養子縁組里親1名、長期養育里親2名

ファミリーグループホーム里親2名

<調査3>職員へのインタビュー

被験者 児童養護施設職員1名、乳児院職員2

名、児童相談所職員1名

調査においては、①里子が里親と共に暮らすという日常や体験の過程を描き出すこと、②里子が委託されて、その後どのような葛藤や不安苦勞や喜びを感じながら親子関係を築いていくのかということに注目してインタビュー調査を行った。そして、口述されたことに分析、考察を加え「子どもの養育に必要なこと」を明らかにしていった。

## 3. 「社会的養護の対象となる子どもの養育に必要なこと」

3つの調査結果で、共通して述べられていることを整理、検討していくことにより「子どもの養育に必要なこと」として、以下の10項目が明らかになった。

1. 安心して暮らせること
2. パーマネンシーの保障
3. 望まれた子どもであること
4. 心理的親の存在
5. 自己肯定感
6. 「丸ごと受けとめる」ということの重要性
7. 明確に、はっきりとわかる形で愛情を示すことの大切さ
8. 家庭での生活体験の必要性
9. リジリアンスを評価する
10. 「普通のこと」「あたりまえのこと」を満たす

以上10項目の内容について考察を進めていくなかで、1から6までに挙げた項目は、一般の子育てにも共通していえることであるということがわかった。しかし、7から10までに挙げた項目は、社会的養護を必要とする子どもの養育において、特別に配慮が必要なことであろう。

#### 4. 血のつながりを超えた里親養育の可能性

先に示した10項目をまとめて述べると、里親と里子が安心して暮らし丸ごと受けとめられていると感じること、そして特別なおとな、つまり心理的親との永続性のある関係（パーマネンシーの保障）を築き、愛されている望まれた子どもであるということを実感できることが里親養育において大切なことなのである。以上のことが保障されたのち生まれてくるものは「自分はここにいていい」「自分は大切な人である」という自己肯定感なのではないだろうか。そして、自己肯定感に支えられて自分の命、自分の存在が、かけがえのないものであることに気づいていくことができるといえよう。社会的養護を必要とする子どもたちのなかには里親に委託される前に、心が満たされない感覚を抱いてい

る子どもも少なくない。そのことから一般の家庭で養育されるほかの子ども以上に、より深く満たされたいと願う子どもの心に寄り添う必要がある。それは、明確に、はっきりとわかる形で愛情を示すこと、リジリアンス（回復性、弾力性）を評価するということであろう。そして家庭での生活体験のなかには日々の生活のなかで自然に身につけていくべき多くのことが含まれているのである。それは、彼らの言葉を用いると「普通のこと」「あたりまえのこと」が満たされる暮らしということであった。これは、施設養護で職員が、どんなに意識して専門性をもって子どもたちに接しても家庭における普通の暮らしの中で学ぶことには到底及ばないということであった。

ひとりの子どもが、特定のおとなとかかわり毎日一緒に生活をしていくなかで、基本的な信頼と他者との関わりを学び、地域社会の一員として暮らし社会に巣立っていくのは、子どもの権利であると岩崎が述べている<sup>1)</sup>ように、子どもの権利の尊重という観点から考えても、子どもにとってより家庭に近い、里親家庭や小規模なグループホームによる養育が望ましいといえよう。また、調査から、里子と里親が共に暮らし、さまざまな葛藤や不安、苦労を経て喜びを感じながら親子関係を築いていく過程が理解できた。その道のは決して平坦なものではなかったが、困難にぶつかりながらもそれを乗り越えることができる人間のもつ可能性、ひいては里親の可能性を見出すことができた。芹沢は、今ここに安全に安定的に自分が自分として「ある」という感覚が生まれることは、人が生きていくための基盤であると述べているが<sup>2)</sup>、その感覚を生み出すためには、子どもにとり「丸ごと受けとめる特定の人」が必要なのである。